

震災伝説

平成二年の夏は、うんざりするくらい酷暑の日が続いた。その不快感はかつて経験したことがなかったほどに思われる。

猛暑のさなかの八月二十五日に、東京高等師範学校文科二部のクラス会が開かれた。席上、羽田の軍需工場に動員された昭和十九年から二十年にかけての懐旧談になり、終戦の年の夏も、ひどい暑さだったことが話題にのぼった。

すると、当時クラス担任の教授だった石井庄司先生が「ことしの暑さは終戦の年よりも震災の年に近いように思うので、近ごろは夜寝るとき、大事なものをまとめて枕元に置くようにしています」といわれた。満九十歳になられた石井先生は、大正十二年九月一日の開東大震災のときには二十三歳で、今なお鮮

明な記憶をお持ちなのである。

夏休み中に、必要があつて私は震災前後の雑誌を国会図書館や近代文学館で調べていたので、石井先生のお話がただちにうなずけた。小田原に住んでいた北原白秋が『詩と音楽』震災記念号（大正十二年十月二十五日発行）に「この夏ほど凌ぎがたく思つたことは無い。今までに無い暑さであつた」と書いているのを読んだばかりだったからである。

昭和三十三年十一月に六十五歳で亡くなつた木村莊八画伯の「震災伝説」について、思いがけない発見をしたのも、やはり震災の特集号を調べていたときのことだった。

木村画伯は岸田劉生らとヒュウザン会を起こした洋画家で、永井荷風「溷束綺譚」の挿

槌田満文

絵で知られている。私は晩年の画伯と縁があつて随筆集の編集を手伝うために、昭和二十八年から翌年にかけて、しばしば杉並区和田堀の木村家を訪ねたことがあつた。

画伯の生活時間は、若いころから普通人と夜昼が逆で、午後十一時を過ぎると、そろそろ話に興が乗ってくる。終電車を気にして私が時計を見たり腰を浮かせたりすると、御機嫌がはなはだよろしくない。したがって、帰宅は十中八九「午前様」になつた。

画伯は皆が帰ってから、画室で仕事にかかる。夫人が寝たあとの深夜には話し相手がないから、いつも十四以上飼っていた猫がお相手を勤めることになつた。

仕事や手紙などを書き終えて床に入るのは毎朝六時前後で、正午ごろはちょうど熟睡し

ている時刻に当たると。震災当時は東大に近い本郷区森川町に住んでいたが、正午二分前の大地震を眠っていて知らなかったという話を、私は画伯を知る人から聞いていた。

この伝説(?)について、直接その真偽をたずねてみたことがある。画伯は否定も肯定もせず、ただ「あの日は浅草公園近くの池へ泳ぎにゆくつもりだったから、行つてたらきつと死んでいたね」という答えが返ってきただけだった。

ところが『女性改造』と『婦人之友』の震災記念号(ともに大正十二年十月一日発行)で画伯の震災体験記を見つけて、この伝説が誤伝にすぎなかったことを知ったのである。

『女性改造』のアンケート特集「震災と諸家の感想」で「最初の地震の時どこにいて如何なさいましたか」という問いに、画伯は次のように答えていた。

「私は地震の時二階にゐましたが例に依つて震動が来るとすぐ階段を駆けおりて下の室へ行き、大い地震だとその頃にはあらかた動揺が静まります。然し此度の場合は変に益々烈しくゆれる気がするので、あと家の者を呼んで三人で一番丈夫と思ふ黒簾筒の前にかたまり、すると、玄関の壁がなだれおちた

と思ひます。いつもよりはずつと大きな地震だと感じましたが、頭の上からばら／＼簾筒の上の京人形や何かと落ちて来る。見ると柱の何所かと云ひ難く外から杵ぢられでもする様にギクギクと音を立て、自づと襖が外れて来ました。

妻が大きな眼をしてそれを見てゐるから『見るな々々』と云つて私の手でその眼を蔽ひました。脳貧血を起し想な感じがしたからですが或ひは私自身にさう云ふ恐れがあつたのでせう。三人がかたまつて逼息してゐました。

たしかそのまゝ二度目の強震もさうして過したものでせう。一体何分間ぢつとしてゐたか、何分間地震があつたか、どう云ふ風にそれがゆれたか、――弁別できません。然し多分非常に長時間に思ふが実は一分か二分の間のことでしたらう。ちよつと静まるとその間を見て急いで外へ出ました。……」

『婦人之友』の「震災第一日」はこの後に続く内容で、次のように書き出されている。

「私は災害の当時近所の沢山のひと一所に往來に出てゐました。私の家は幸ひ地震にもさう損傷されず火も遠かつたのですが、それでも外へ出て見るとすぐ通りを隔て、向ふの帝

国大学は震動の後直ぐと発火して、しきりに燃えひろがつてゐますし、やがて南の方からは、――たしか一つ橋とかから出た火と云ふ――その煙りの大旗が妙に幅広く街を包んでやつて来るのが見える。――然しナニ大丈夫と何所か心の隅で思つてゐたのです。……」

いずれも九月半ばの執筆だけに、生々しい臨場感にあふれた記述といつてよい。地震が起きたとき寝ていたかどうかは明記されていないが、おそらくいつものようにまだ就寝中だったのではないかと思われる。

ただ、地震のとき眠っていたことはあり得るが、地震を全く知らなかったというのは、よく考えてみればはなはだ現実的でない。私の質問に否定も肯定もされなかつたのは、自分に関する伝説が一人歩きしているのを、ひそかに面白がつておられたからではなかつたらうか。

木村画伯が存命なら、ことし九十七歳になる。今なお現役の中川一政画伯が同い年のことでもあり、もし石井先生のようにお元気であれば、もう一度真相を確かめることができなかつたかもしれない。それがかなわないので残念である。(一九九〇・十一月・三)